相談援助実習における実習マネジメントの現状と今後の課題

―実習指導者フォローアップ研修におけるフォーカスグループインタビューデータのテキストマイニングから―

渡　邊　隆　文[1)]　安　保　　尚[2)]　井　坂　優　美[3)]
土　屋　瑛莉香[4)]　楢　木　博　之[5)]　初鹿野　美　穂[4)]
和　光　勇　介[6)]　渡　辺　健　市[7)]　渡　辺　裕　一[8)]

Current states and issues in the field training programing for social work students

～ From text mining focus group interview data in the discussion with field training supervisors～

WATANABE Takafumi, ANBO Hisashi, ISAKA Yumi,
TSUCHIYA Erika, NARAKI Hiroyuki, HAJIKANO Miho,
WAKO Yusuke, WATANABE Ken-ichi, WATANABE Yuichi

抄　録

近年、福祉に関わる様々な問題が取り上げられ、支援を担う社会福祉専門職の質と量の確保が求められるようになった。社会福祉士の養成においては、これまで以上に養成校だけでなく支援現場の実習指導者への期待が寄せられており、専門職を養成する過程の中でも相談援助実習が果たす役割は大きい。そこで、本研究では平成27年度実習指導者フォローアップ研修において話し合われた内容を基に実習指導者と養成校担当者が抱える実習プログラミングの現状と今後の課題を明らかにすることを目的とした。研修参加者を対象としブレーンストーミングを実施した。その後、抽出されたデータを基にテキストマイニングを行った。更に、言語的手法を用いて生成されたカテゴリ間の関連を見るためにコレスポンデンス分析を行った結果、６つのグループに分類された。

キーワード：社会福祉士、相談援助実習、テキストマイニング、実習プログラミング

1）健康科学大学　2）富士吉田市役所　3）みのりの里まるたき　4）山梨赤十字病院
5）身延山大学　6）富士河口湖町役場　7）富士吉田市役所　8）武蔵野大学

Ⅰ．研究の背景

近年、高齢者、障害・疾患、子ども・家族、経済的困窮等の社会問題が増加し、福祉に関わる問題、支援を担う社会福祉専門職の質と量の確保が求められるようになった。社会福祉士の養成においては、カリキュラム改正や実習の在り方について議論され、これまで以上に養成校だけでなく支援現場の実習指導者への期待が寄せられている。専門職を養成する過程において、特に支援現場で行われる相談援助実習が果たす役割は大きい。

山梨県においても社会福士会が中心となり、社会福祉士の相談援助実習の充実のため、実習指導者の育成やフォローアップのための取り組みを行っている。具体的には、社会福祉士会と社会福祉士養成校協会山梨県支部の共催で実習指導者講習会の受講者（他都道府県等での受講者含む）を対象としたフォローアップ研修として、年１回の実習指導者会議を開催している。平成27年度の会議では、実習プログラミングに焦点をあて、実習指導者が抱える現状と課題について養成校とともに検討した。本研究では、平成27年度実習指導者フォローアップ研修中に行われたフォーカスグループインタビューの内容を分析し、実習指導者と養成校担当者が抱える実習プログラミングの現状と今後の課題を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．研究方法

１．対象および方法

山梨県社会福祉士会主催の平成28年３月６日に実施した「平成27年度実習指導者フォローアップ研修」の参加者である養成校担当教員と実習指導者18名を対象とした。１グループ６名のグループに分け、「実習プログラミングを行う際に感じている課題」をテーマに話し合い、ブレインストーミングの後、フォーカスグループインタビューを実施した。

２．分析方法

フォーカスグループインタビューは対象者の同意を得た上でICレコーダーに録音し、録音記録に基づいて逐語録を作成した。実習プログラミングの現状と課題を検討するために得られたデータに対してテキストマイニングを行った。さらに、テキストマイニングの結果、生成されたカテゴリ間の関係をコレスポンデンス分析によって確認した。なお、分析には、IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4を使用した。

３．分析手順

得られたデータを意味のある段落ごとに分けたものを１件の分析単位に設定した。その結果、115件の分析単位が設定された。各分析単位の内容を吟味し、指している対象が明らかな指示語（あれ、これ、他）を対象語へ置き換え、明らかな間違いの修正等を行った。

上記の手続きによって得られた分析単位について、IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4を用いて、形態素解析を行った。形態素とは「意味を持つ最小の言語単位」（藤井ら、2005）である。形態素解析の結果、本研究の分析意図とは関係しない語彙や誤認識による語彙も数多く抽出された。これらを類義語や不要語の設定によって修正し、再度、形態素解析を行った。その結果抽出された語彙に対して、言語学的手法（設定：すべてのタイプを対象、サブカテゴリによる階層化はせずフラットなカテゴリ出力、グループ化における共起設定なし、作成されるトップカテゴリの最大個数30、カテゴリあたりの記述子数の最小値２）を用いてカテゴリの自動作成を行った。これは、言語的な視点から似たような意味を持つ語彙をグループ化する手法である（内田ら、2012）。自動的に作成されたカテゴリには、本研究の目的に対して重要な語句がカテゴリとして含まれていなかったり、不要なカテゴリが作成されていたりしたため、カテゴリを手動で追加及び削除する作業を行った。IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4では、カテゴリをいかに作成するか、「分析者にとって意味のある語彙とは何か（内田ら、2012）」に基づいて、すべて研究者に委ねられている。

１つの分析単位内に各カテゴリに該当するテキストが含まれている場合には１、含まれていない場合には０とする２値変数とし、IBM SPSS Statistics Ver. 20.0により使用可能なデータとしてエクスポートした。作成されたカテゴリ間の関係性について検討するため、エクスポートされたデータを使用してコレスポンデンス分析を行った。

４．倫理的配慮

倫理的配慮については、調査対象者に対して会場にて、①研究の概要に関する項目、②個人情報保護法に関する項目、③侵襲および安全管理に関する事項、④インフォームド・コンセントに関する事項について口頭説明し、その場で本件への調査協力の同意を口頭で得た。また、グループでのブレーンストーミングの録音について同意を得た。

Ⅲ．結　果

１．抽出された語彙

抽出された語彙のうち上位頻出20語を以下の表１に示す。今回は分析対象が音声データによるブレーンストーミングだったため、「いう」、「ある」、「思う」という語彙が多く抽出される結果となった。他方では、「学生」、「実習」、「実習生」、「プログラム」そして「社会福祉士」といった研究の焦点となる実習プログラミングに関する重要な語彙も多く抽出されている。

２．作成されたカテゴリ

言語学的手法を用いてカテゴリの生成を行い、加えて、手動でカテゴリの作成・追加・削除を行った結果、21カテゴリが生成された（表２）。カテゴリを含む分析単位が最も多かったのは「実習生」で82件（71.3%）、続いて「コミュニケーション」57件

表１　テキストマイニングによる語彙の抽出結果（頻出20語）

いう（101）	ある（65）	学生（54）	思う（50）	実習（39）
ない（34）	中（34）	やる（27）	実習生（25）	話（25）
いる（24）	くる（23）	言う（23）	社会福祉士（23）	プログラム（23）
私（23）	なる（21）	感じる（19）	できる（17）	すごい（17）

※（　）内は当該語彙が本文に含まれていた分析単位数を表す。

表２　言語学的手法を用いたカテゴリ作成の結果

ソーシャルワーク(11:19)	実習プロセス(14:21)	評価(14:17)	日常業務(4:14)	技術(12:19)
立案(13:20)	実習プログラム(13:36)	コミュニケーション(33:57)	実習目標(14:27)	モチベーション(18:21)
実習指導(10:12)	実習施設(21:41)	ジレンマ(18:26)	フィードバック(7:10)	実習指導者(14:49)
養成校(9:25)	実習指導担当教員(12:24)	社会福祉士(3:24)	実習体験(11:42)	負担感(11:13)
実習生（10:82）				

※（　）内は、左側が当該カテゴリに含まれる語彙数、右側が当該カテゴリが含まれる分析単位数をそれぞれ表す。

（49.5％）、「実習指導者」49件（42.6％）、「実習体験」42件（36.5％）、「実習施設」41件（35.6％）、「実習プログラム」36件（31.3％）となった。

３．コレスポンデンス分析結果

作成されたカテゴリ間の関連を検討するため、作成された21カテゴリに対してコレスポンデンス分析を行った（図１）。実習指導における実習プログラミングの課題について、内容を考慮してカテゴリを○で囲み、近い距離に布置されたカテゴリによって、①養成校の実習指導担当教員による実習指導と実習指導者とのコミュニケーションにおけるジレンマ（「コミュニケーション」「養成校」「実習指導者」「実習指導」「実習指導担当教員」「ジレンマ」）、②実習目標の実習プログラムへのフィードバック（「実習プログラム」「フィードバック」「実習目標」）、③実習生の評価を踏まえた実習体験の立案（「実習生」「立案」「評価」）、④実習プロセスにおけるソーシャルワークの技術の学びの担保（「ソーシャルワーク」「技術」「実習プロセス」）、⑤実習施設の社会福祉士のモチベーション（「モチベーション」「実習施設」「社会福祉士」）、⑥日常業務への負担感の影響（「負担感」「日常業務」）の６個のグループに分類され、実習プログラミングの課題として解釈された。

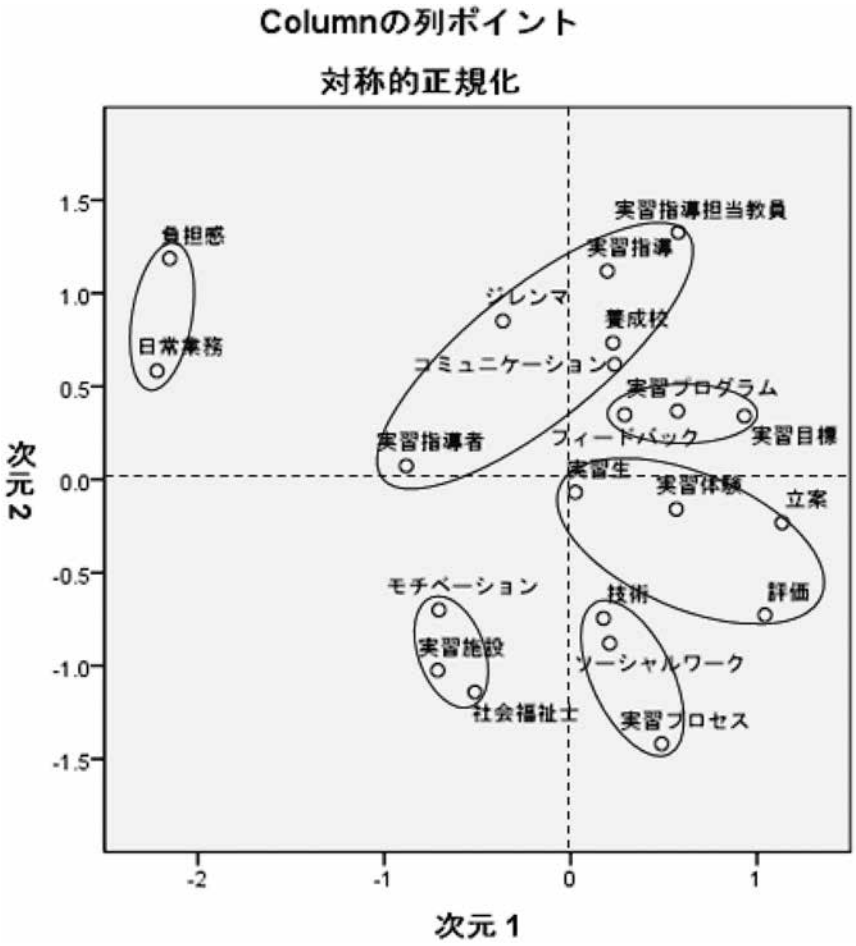

図１．コレスポンデンス分析の結果

Ⅳ．考　察

１．養成校の実習指導担当教員による実習指導と実習指導者とのコミュニケーションにおけるジレンマ

養成校の実習指導担当教員と実習指導者の間で、実習プログラミングの立案や変更に関する打ち合わせを必要としている。しかし、コミュニケーションがうまく取れず、ジレンマを感じている状況がプログラミングの課題として示唆されている。より緊密なやり取りができる関係づくりが求められている。

２．実習目標の実習プログラムへのフィードバック

養成校、実習生、ソーシャルワーカーとしての実習目標を、実習プログラムにいかに反映するかという課題が示唆されている。実習目標と実習プログラムを結び付ける実習

指導者のスキルの向上や養成校の担当教員とのアイディアづくりへの協働が求められている。

３．実習生の評価を踏まえた実習体験の立案

上記「２.」で提示した課題と関連して、実習体験によって学びが得られる実習生かどうかの評価と実習プログラミングの適合度をいかに高めるかが、実習プログラミングの課題として提示された。実習生の力や準備状況、または実習中の学びの状況によって、実習プログラムを変更・調整する必要性が示唆されている。

４．実習プロセスにおけるソーシャルワークの技術の学びの担保

実習プロセスとしては、職場実習、職種実習、ソーシャルワーク実習の順で緩やかに設定されているが、ここでは、そのプロセスにおいてソーシャルワークの技術に関する学びをいかに担保するかの難しさが課題として提示された。実習生のソーシャルワークに関連する技術を高めるには、実習、つまり「実際に行うこと」が必要である。しかし、その機会を担保することが難しい現状が示された。

５．実習施設の社会福祉士のモチベーション

実習プログラミングにおいて、どのような実習プログラムを組むかは実習施設の社会福祉士のモチベーションが関連していることが示唆されている。実習プログラミングを行う実習指導者だけでなく、実習プログラムの実施にかかわる実習施設の社会福祉士のモチベーションが影響している可能性が示唆された。

６．日常業務への負担感の影響

実習プログラミングには、日常業務への負担感が影響していることが示唆された。日常業務の忙しさや負担が重い場合には、負担の少ないプログラムを選択することが考えられる。

Ⅴ．研究の限界と課題

本研究の限界として、分析対象者が限定的であったこと、分析結果の妥当性の検証結果の不足の２点が挙げられる。本調査は山梨県内の実習担当者を対象としたため、他地域との比較検討を行い、実習現場と養成校とはどのように役割を分担し連携することが望ましいのか、具体的な調査が必要であろう。また、他領域の専門職の実習指導・養成からも専門職養成と効果的な実習指導について示唆が得られる可能性がある。これらの課題について、今後、さらにデータの収集および分析を進めることで、支援現場から求められる実習プログラミングの展開に対する課題や対応策について整理できるものと考える。

謝　辞

本研究をまとめるにあたり、社会福祉士相談援助実習の受け入れ先である施設・機関の実習担当者の皆様には調査・研究の趣旨を理解し、調査協力を快く引き受けていただきました。ご協力いただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げ、謝辞にかえさせていただきます。

〈参考文献〉

社団法人日本社会福祉士会（2014)『社会福祉士実習指導者テキスト第２版』，中央法規出版 .

社団法人日本社会福祉士養成校協会編（2009)『相談援助実 習指導・現場実習教員テキスト』中央法規出版.

長谷川国俊・上野谷加代子・白澤政和・中谷陽明編（2014)『社会福祉士相談援助実習 第２版』中央法規出版 .

藤井美和・小杉考司・李政元編著,「福祉・心理・看護のテキストマイニング入門」中央法規．2005, p10, 26, 38-42.

内田治・川嶋敦子・磯崎幸子,「SPSS によるテキストマイニング入門」，オーム社，2012，p11, 62

Abstract

Current situation and issues in managing field training programs
for social work students
— Based on focus group interview with field training supervisors
analyzed by text mining —

The recent years have seen an increasing demand for professionalized social workers in quality as well as quantity, given the diverse social issues that need to be tackled. The need for improvement in curriculum and methods to implement field training for students to be certified social workers is discussed frequently. Field training supervisors are expected to have high coaching abilities more than ever before. In the process of increasing the number of certified social workers, field training plays an important role. This study aimed to identify the current situations and issues faced by supervisors in the program of field training. A brainstorming session was held with the field training supervisors. Text mining was conducted on the data extracted from the session to generate categories. The text mining data was further analyzed by a correspondence analysis to reveal the relationships among the categories. The categories were classified into 6 groups such as motivation of social work and impact on work burden.

Key word：Social worker
Social work practical training
Text mining
Field training program